



石田ゆうすけ  
いしだ・ゆうすけ

旅行作家・エッセイスト。赤ちゃんパンダが2年に一度ぐらい生まれる和歌山県の白浜町生まれ。自転車で7年半かけて世界を一周する。その旅をつづった『行かずに死ねるか!』(幻冬舎文庫)は台湾、中国、韓国でも出版され、国内外で累計24万部を超えるヒット作に。他に『いちばん危険なトイレといちばんの星空』『洗面器でヤギごはん』(ともに幻冬舎文庫)など。

## 詐欺師を笑顔にすることは

旅行者をカモにしてやろう、と手ぐすね引いて待っている連中は、どの国にもいる。そんな彼らにつきまとわれたときに役立つ英語をひとつ、お教えしますね。

あれはモロッコの観光地。海辺で夕日を見ていると、ヒゲ面のオヤジがやってきて、英語で話しかけてきた。「俺には日本人の友人がいるんだ。家に写真があるから見にこないか?」

毎度おなじみのセリフだ。友好で誘ってくる人もいるが、このオヤジはたぶん、違う。経験を積みば、だいたい見分けはつく。僕はやんわりと断った。

「何を心配してるんだ。俺は信用に値する男だ。それが証拠にこれを見ろ。日本の友人が俺にくれた手紙だ。」

オヤジはそう言って、シャツの胸ポケットから手紙を何通も出してきた。もうすぐで噴き出すところだった。そんなもの、常に持ち歩いているの? 不自然でしょ。

好奇心から一枚読ませてもらうと、日本語でこう書かれてあった。

《この人は信用できません。詐欺師です。》

体がプルプル震えた。オヤジは何が書かれているのかわらずに僕に見せ、自慢げに鼻を膨らませているのだ。

しかし、どうも憎めなかった。やり口が紋切り型すぎて笑えるうえに、大きな鼻がついたその顔にはどこか愛嬌があって、見ているだけで親近感がわくのだ。

手紙を次々に広げ、懸命に自分をアピールするオヤジに、僕はやさしい気持ちになって「OK, もういいよ」と声をかけ、続けて、ゆっくりこう言った。

“I know.”

俺、そういう手口、ぜんぶ知ってるから——。

オヤジは一瞬固まり、僕の顔を見たあと、きまり悪そうに笑い、手紙をていねいに畳んでポケットにしまった。それからふたりで夕日を眺め、旅の話をしたり、彼の子ども話を聞いたりして、静かに笑い合ったのだった。